

# ジェンダー・フリー・コミュニケーションに関する一考察

～システム論的視点からの問題解決～

奥野 雅子\*

A Study on Gender-free-Communication : problem-solving from systemic view

Masako Okuno

## 要旨

生物学的性差である「セックス」に対して、社会的に構成された性として「ジェンダー」という概念がある。本稿では、「ジェンダー」を個人の特性と捉えず、システム論的視点から、コミュニケーションの中で今ここに表出される女性性、男性性として捉え、その可変性、相互作用性、現在性に着目する。「ジェンダー」をめぐる葛藤から解放され、問題解決を目指す「コミュニケーション」のあり方を「ジェンダー・フリー・コミュニケーション」として探索することを目的とする。まず、性差によるコミュニケーションの違いについて述べ、イデオロギーについて検討する。次に、コミュニケーションの中に現れる「ジェンダー」の相互作用を、相補性、相称性、メタ相補性という3つのパターンに分類することで理論的検討を加える。最後に、「ジェンダー」に関する問題の解決として、メタ相補的な立場で「ジェンダー・フリー・コミュニケーション」を活用し、「ジェンダー」を操作していく意義について考察を行う。

キー・ワード：「ジェンダー」「コミュニケーション」「システム論的視点」「メタ相補」

## I はじめに

女性・男性という生物学的な性のあり方を「セックス」として捉えられる一方、文化的・社会的、心理的な性のあり方は「ジェンダー」と呼ばれている。「ジェンダー」は、“女性、男性はこうあるべき”という社会的枠づけや“女性らしさ・男性らしさ”といった“らしさ”に相当する。「セックス」は自然が生み出したものであり、「ジェンダー」は人間社会や文化によって構成された性である（伊藤・國信，2004）。つまり、「ジェンダー」は「セックス」に対する社会的意味づけである（青野・森永・土肥，1999）。したがって、社会が変化すれば意味づけも変わるものであるため、時代や文化によっても異なることになる。

しかし、女性や男性のイメージが時代を経て伝えられ、「ジェンダー・イデオロギー」や「ジェンダー・ステレオタイプ」が作り上げられる。「ジェンダー・イデオロギー」とは、男性が女性に対して優勢な立場に立つ一方、男性同士に競争を強いるような差別的意識であり（高橋・湯川，2008）、「ジェンダー・ステレオタイプ」は女性・男性に対して人々が共有する思い込みや信念である（青野・森永・土井，1999）。このような社会的価値観が個人に影響を与え、女性的ないし男性的になっていくのである。個人の中から自然発生的に「ジェンダー」が生まれ

---

\* 尚綱学院大学 非常勤講師  
東北大学 教育学研究科 博士研究員

てくるわけでは決してない。社会的要請によって「ジェンダー」が演じられていくこともあり、こうあるべきという「ジェンダー」の拘束によって、女性として男性として生きる上で様々な問題にぶつかり、葛藤を経験することは誰しもあるといえる。

本稿では、「ジェンダー」をめぐる葛藤から解放され、問題解決を目指す「コミュニケーション」のあり方を探索することを目的にする。つまり、「ジェンダー・フリー・コミュニケーション」に関して論じていく。ここで論じる「ジェンダー・フリー」とは、性差を否定し、女性らしさ、男性らしさの区別をなくして人間の中性化を目指すことではない。状況によっては、女性であっても男性性を表出するコミュニケーションは有効であるし、男性であっても女性的なコミュニケーションを行うことができるという自由さを意味する。ひとりの人間は女性性と男性性の間でゆらぐことが可能であり、「ジェンダー」は“個人がもつ (having) ものではなく、行う (doing) もの (West & Zimmerman, 1987)”ということになる。つまり、「ジェンダー」を過去の生育歴で決定されるようなパーソナリティの中に見出すのではなく、今ここに行われているコミュニケーションの中から女性性、男性性が表出するという視点に立って捉えてみることである (長谷川, 2006)。この捉え方は、長谷川 (2006) が「空間的ジェンダー論」として提唱するものであり、“ある男性の男性性はまわりの者との相互影響によって維持される。ある女性の女性性を支えているのも相互影響である。男性的にみえる男性でも周りの状況によってはむしろ女性的にもなりえる。女性についても同様であると考えうる”というシステム論的な立場である。本稿では、「ジェンダー」が今ここに展開されているコミュニケーションの中で変化するという点に着目し、「ジェンダー・フリー・コミュニケーション」に関する考察を行う。

## II 性差によるコミュニケーションの違い

今行われているコミュニケーションの中に女性性、男性性が現われるという視点は、「ジェンダー」を個人の特性を超えたところで捉えることであり、置かれている状況や対人関係が「ジェンダー」を作り出しているとみることである。一方、性差によるコミュニケーションの違いから、男とは女とはこういうものだというイデオロギーが形成される。そのイデオロギーに反応しながら、目の前の相手とコミュニケーションを行うことによって新たなイデオロギーが再生産されていくといった入れ子型構造が考えられる。まず、性差によるコミュニケーションの違いに関して述べる。

### 1. 非言語コミュニケーション

女性は非言語コミュニケーションを理解することに優れていることが報告された (Rosenthal et al., 1979; Hall, 1984)。これは、女性は言語使用の不十分な子どもの非言語コミュニケーションを理解する必要性が多く、受身的な行動を社会的役割として期待されているため、非言語行動の観察力が大きいことが考えられる (大坊, 2001)。また、女性は男性に比べて、視線を多く向けることが明らかにされ (Exline, 1963; Exline, Gray & Schuette, 1965)、日本でも同様な結果が確認されている (大坊, 1982; 大坊, 1983)。女性が男性より多くの視線を向けることは、女性は社会的場面における視線の持つ意味を重視する傾向にあることも示唆している (石川, 2006)。さらに、女性は男性に比べてうなずきを多く用いることも報告された (奥野・石川・

越道・長谷川, 2006)。以上の知見から、女性のほうが男性より、視線やうなずきなどの非言語コミュニケーションを重視することが考えられる。

発言時間は言葉の内容ではないため、発話を独占するという意味で非言語行動として捉えて着目してみると、初対面の男性と女性という組み合わせで男性が女性に比較して発言時間が長いことが示された（江原・好井・山崎, 1993；内田, 1993）。視線と発言時間との関連についての研究でも、初対面の男性と女性の会話場面において、男性は女性に対してあまり視線を向けずに発言に終始する傾向があり、女性は視線を長く多く向け、発言は少ないという特徴があった（大坊, 1982）。しかし、男性は親密度が高いと発言も視線も活発になり、女性はそれと反対のコミュニケーションになることが報告されている（大坊, 1992）。

Zimmerman & West (1975) は、男性は驚くべき頻度で女性の発言に割り込んでいることを明らかにした。そして、男性が割り込むと女性が沈黙することが分かった。また、男性と女性が同時に発話を行うとき女性は沈黙し、女性が話しているときに男性が相づちを遅らせると女性は沈黙することも報告された（Zimmerman & West, 1975）。言葉中心の主張的な役割が期待されてきた男性に対して、協調性、他者への配慮、感情的受容が期待されてきた女性が、感情的敏感さをより発揮しているための特徴と考えられる（大坊, 2007）。

パラ言語を非言語コミュニケーションの範疇に含めて述べるが、話すときの声の高さ（ピッチ）は、男性のほうが女性よりも低いことが明らかである。これは男女の解剖学的な構造の違いによるものであり、男性の咽頭のほうが大きく、声帯もより長く厚いため、振動するときの基本周波数が、女性よりも低くなるのである。しかし、ピッチの幅は女性のほうが男性よりも広いと、女性の方が興奮しやすく、感情的になりやすいと受け取られることが多い（Romaine, 1994）。

## 2. 言語コミュニケーション

Fishman (1983) は、異性カップルの会話分析より、男女の言語コミュニケーションの違いを以下のように明らかに示した。女性は相づちを打ち、質問をすることによって会話を進める努力を行っており、かつ、聞き手の注意を引くような「知ってる？」や「面白いよ」などの表現を用いている。一方、男性は断定的な「言い切り」をし、その後その話題に対して長い話を続ける。話題提供を行うのは女性のほうではあるが会話は発展せず、男性が提供した話題は発展しやすいことが報告された（Fishman, 1983）。このような結果は、男性による会話の支配が女性の協力によって成り立っていることを示唆している（Swann, 1988）。

同性間の会話においても、女性同士は協調的会話を行い、提案形、弱め表現、ほめ言葉やていねい表現を用いる。一方、男性同士は競争的会話を行い、発言時間が長く、命令形を多く用いる。また、反論や突然の話題変更をし、一緒にいても沈黙が多いことが報告されている（中村, 2002）。

このような女性・男性による言語コミュニケーションの違いは、女性が使用する言葉としてもともと存在した「女性語」の影響が考えられる。「女性語」は、女性が実際使用している言葉ではなく、抽象的規範であり、「ジェンダー・イデオロギー」である（中村, 2002）。Lakoff (1975) は、アメリカにおける女性特有の言葉使いを「女性語」として示し、女性が社会的に低い地位に置かれていることが言語に現れていることを指摘した。また、日本でも、日本語は女性に女らしさ求め、女の行動を制限する言語であり、女性の低い地位を反映しているとされ

た(寿岳, 1979)。石丸(2001)はLakoff(1975)が示した「女性語」の特徴を日本語に当てはめ、12種類に集約した。これを表1に示す。日米における「女性語」の対応の例として、英語の“you know” “you see” “I’d say” “I’d think” という表現は、終助詞「ね(え)」に相当する(Martin, 1975)。平田(2004)は、終助詞「ね」や「よ」は女性が婉曲表現のひとつとして多用し、特に男性が「ね」を多用すると女性的な印象になることを示した。さらに、言葉には常に「権力性」が付きまとうことを指摘した(平田, 2004)。しかし、石丸(2001)はLakoff(1975)が示した「女性語」の特徴を日本社会での男女の談話資料に基づいて検討し、男女が平等な立場で参加する政治座談会では、女性話者の発話にLakoff(1975)が指摘した「女性語」の特徴は観察されないことを報告した。これらの研究は、女性の社会的地位と言語を結びつけて研究するという観点で、フェミニズムの立場においての女性語研究の先駆けとなった。

表 1 女性語の特徴

女性語の特徴	例
① 誇張する表現の多用	just, really, very very, etc.
② 断定を避けるために垣根表現の多用	I wonder, I guess, I think, etc.
③ 付加疑問文の多用	Sure is hot here, isn't it?
④ 平叙文に上昇調のイントネーションを付加	A : When will dinner be ready? B : Oh, around six o'clock?
⑤ 命令文の使用を避け、間接的依頼文の多用	<u>Please</u> close the door. <u>Will you</u> close the door? <u>Won't you</u> close the door?
⑥ 女性独特の間投詞の使用	<u>Oh dear</u> , you've put the peanut butter in the refrigerator again.
⑦ 埋め言葉の多用	you see, you know, well, etc.
⑧ 細やかな色彩表現の多用	mauve, aquamarine, beige, etc.
⑨ 女性特有の形容詞の使用	adorable, charming, sweet, lovely, etc.
⑩ 強調した強勢の使用	It was a BRILLIANT performance.
⑪ 人間関係の維持を重視する強調的言葉遣い	A : I saw an accident this morning. That was REALLY TERRIBLE.
	B : Yes, accidents are terrible, isn't it? And was it serious?
⑫ 規範的な言葉の使用	A : Oh, you have nothing to worry. A : Oh, you mean you don't have anything to worry about?

一方、井出(1985)は、言語の性差を社会的地位の差であるとするフェミニズムの立場とは別の観点から、日本においては女性が男性より丁寧な言葉使いをするのは、地位の差によるものではなく、役割の差によるものであると述べた。つまり、付き合いをうまく行うためのやりとりを重んじる役割である。そこには、相手を高め自分を相対的に低めるためだけでなく、自分の地位と品位を示すためのものである、というポジティブな意味がある(井出, 1997)。Tannen(1991)も、女性が丁寧な言語表現を用いることを、社会的地位とは直接結びつけず、

男性と女性が異なる言語を使用するのは、異なる文化に属しているからであると説明した。つまり、男性は、地位を重んじ、独立性を重視する世界に属しており、女性は人と人とのつながりを重視する世界に属しているということであり、社会的に支配的あるいは従属的な立場にあるということではないと述べた (Tannen, 1991)。

### 3. コミュニケーションの影響における性差

男女が用いるコミュニケーションの違いについて述べてきたが、コミュニケーションの受け手になった場合の影響されやすさや感受性、つまり、被影響性 (influenceability) の性差について取り上げる。被影響性の性差についての先行研究では、女性が男性よりも被影響性が高いと報告されてきた (McGuire, 1968; Eagly & Carli, 1981)。東 (1997) も、女性は自分の意見を変えるように説得されやすく、暗示を受けやすく、同調しやすいと述べた。同意への圧力 (自由への脅威) が大きい場合、男性は抵抗を示すが、女性は内面的にはリアクティブ反応を生起しながらも外面的には同調傾向を示すことが報告された (今城, 1984; 上野, 1994)。ところが、男性は女性に適した問題に対して説得されやすく、女性は男性に適した問題に対して説得されやすいことが明らかにされた (Cacioppo & Petty, 1980; Karabenick, 1983)。したがって、状況や話題によって被影響性は変化し、女性の方が被影響性が高いとは一概にはいえないことが示唆される。

## Ⅲ コミュニケーションに表出するジェンダーの相互作用性

これまで行われてきた性差によるコミュニケーションの違いに関する研究について述べてきた。女性、男性のコミュニケーションの傾向を知ることにより、それを「イデオロギー」として捉え、それに沿っていくのか、あるいは反発していくのかという態度の方向性がある。一方、性差を説明するという作業は、「ジェンダー」を個人に内在している特質のひとつと捉えていることになる (中村, 2002)。このような考え方は「ジェンダー」が継続的に存在し、日常生活の中の社会との相互作用から切り離されていることを意味する。さらに、女性性と男性性は二項対立であり、両者は交わることがないことになる。しかし、今ここに展開されているコミュニケーションの中で、個人が表出する女性性や男性性は変化しうる。女性性と男性性は二項対立ではなく、度合の高低であり、女性性と男性性が両方高い表現というものも存在しうる。たとえば、笑顔で丁寧と言い切ることがひとつの例である。

「ジェンダー」を属性として捉えず、相互作用的視座で捉える理論的基盤として、まず、「システム理論」(Hall & Fagen, 1956) が挙げられる。物事を原因から結果へと直線的に捉えず、原因と結果は円環的に循環している、ひとつのシステムと捉える立場に身をおくことである。「システム理論」は、コミュニケーション研究に導入され「人間コミュニケーションの語用論」(Watzlawick, Beavin & Jackson, 1967) として理論体系が完成された。「人間コミュニケーションの語用論」では、コミュニケーションに関する5つの公理が提示され、その第5公理に“全てのコミュニケーションの相互作用は相称的か相補的のどちらかであり、前者は同一性、後者は差異に基づいている”というものがある。ここでいう相称性とは相手と同じ行動をすることであり、競争的な関係である。一方、相補性は相手と異なる行動をして相互補完的な関係である。この相補性と相称性の概念を用いて「ジェンダー」の相互作用性について論じる。

### 1. 相補性～女性性と男性性の補完的コミュニケーション～

一方が男性性を表出するようなコミュニケーションを行うとき、他方がそれを支持するように女性性を現すようなコミュニケーションを行うのが相補的なパターンである。たとえば、男性が威圧的に命令形で会話をすることに對して、女性がうなずきながら丁寧な言葉を用いて従う場合である。女性管理職が男性の新入社員に対して支配的な言葉を使い、男性が服従することもこの範疇に入る。女性同士、男性同士といった同性でも女性性と男性性の相補的コミュニケーションは行われる。相補的なコミュニケーションを行っていけば対立や争いは発生しないが、この支配と服従の関係がエスカレーションしていく危険性がある。そうなると双方の溝は増大していく。この例として、ドメスティック・バイオレンスのカップルの場合、暴力をふるう夫に対して無抵抗である妻は、夫に服従することで夫の暴力を維持、促進していることになる。暴力をふるう夫は最初からそうだったのではなく、関係のある時点から、なにかのきっかけで暴力的になったことが知られているが（上野, 2006）、何らかの抑制が働かない限り、関係は歪められていき両者の敵対性は強まり関係は崩壊に導かれる。女性的なコミュニケーションが男性的なコミュニケーションを呼び起こし、男性的なコミュニケーションが女性的なコミュニケーションを強化していくパターンである。

### 2. 相称性～女性性あるいは男性性の競争～

一方がコミュニケーションの中で女性性を表出すると他方も同様に女性的なコミュニケーションを行う、あるいは男性的なコミュニケーションに対して男性的なコミュニケーションで反応するような相称的なパターンである。たとえば、男性同士が競争的会話を行い、命令形を用いて反論を繰り返していると次第にエスカレーションし争いに発展することがある。あるいは、女性同士が協調的会話を行い、提案や弱め表現を継続的に用いていると話が進まず、物事を決定しなければならない場面で決まらないという事態が起きる。また、お互いに相手の話を促進し聞くことのみ重点的に行っていると、沈黙や気まずい雰囲気にもなりえる。このように、同じコミュニケーションのパターンを持っている両者が同じ行動を行うと、互いが互いを駆り立てるようにますます強い行動を取っていくプロセスが進行しがちである。何らかの歯止めが機能しない限り、お互いへの敵意が一方的に高まって関係の破綻は避けられなくなる（Bateson, 1972）。女性性が女性性を、男性性が男性性を強化していくパターンである。

### 3. メタ相補性～ジェンダーのバランス～

純粹に相補的、あるいは相称的のみで「ジェンダー」の相互作用がなされると、健康的な人間関係のバランスを保つことが困難になる。それはコミュニケーションの悪循環が生起しているからである。このとき、この悪循環を見定め、阻止するコミュニケーション行動を取れるならば、「メタ相補的」（Watzlawick, Beavin & Jackson, 1967）であるといえる。相補的なコミュニケーションの中にごくわずかに相称的な行動を混ぜる、また、相称的なコミュニケーションの中に少しの相補的行動を挿入することである（Bateson, 1972）。たとえば、威圧的に命令された場合でも時には服従せずに自分の意見を主張してみること、お互いに譲り合っただけの関係でもたまには一方がリーダーシップを発揮すること、ライバル関係で反論ばかりしているふたりがお互いを尊重しあうなどである。このように、コミュニケーションの中の女性性、男性性を変化させることで著しい緊張の緩和と人間関係の安定化が得られることになる。常に

メタ相補的な立場であるためには、現在ここに展開しているコミュニケーションの流れが相補的なのか相称的なのかを評価できるような高次の次元からの視点が必要になる。

#### Ⅳ ジェンダー・フリー・コミュニケーションの活用～ジェンダーの操作～

今ここに行われるコミュニケーションの中で表出される「ジェンダー」に関する可変性、相互作用性、現在性に着目してきた。時間軸にそった発達心理学的視点とは異なり、女性性・男性性は生育歴で決定されるのではなく、現在のこの空間に「ジェンダー」が生まれるというシステム論的立場（長谷川, 2006）を取ると、どのような「ジェンダー」でも自由に表現できる。こういった意味での「ジェンダー・フリー」なコミュニケーションを問題解決に有効活用することが可能になる。本節では、前述した「メタ相補的」になることで女性性、男性性を操作し、コミュニケーションの悪循環から抜け出す方法について紹介する。

##### 1. 「父性論」から「強い父親の構成」へ

父性論とは、父親が子どもとの関わりにおいて、どのような性質を持つべきであるかについての言説である。近代家族が父親に期待するものとして、家長として家族の統率者であり権力者であることが、あるべき父親像のひとつとなっている（海妻, 2004）。家族の崩壊の原因を「父親不在」とし、一般的に「強い父親」を求める声がある。強い父親になるために男性性が求められることになるが（高橋・湯川, 2008）、現代家族の性役割態度は変化し（熊野, 2008）、現代の日本は戦前の日本と比較して、確かに父親は弱くなった（長谷川, 2006）。家族に何らかの問題が発生し、強い父親が求められる場合、父親自身に絶対的に強くなってもらおうという解決法は時間がかかり効率的とは言えない。しかし、強い父親（夫）のイメージを母親（妻）とのコミュニケーションによって作り上げることができる。

「母親に暴言を吐く高校生の娘の事例」（長谷川, 2006）がある。父親はとてもやさしく娘から父親への暴言はないが、父親は娘を止められず、腫れ物にさわるように接している。このような親子関係の問題は、心理臨床面接でよく相談される家族の問題である。娘の暴言という問題行動に対する解決策として、実際の父親に強くなってもらおうのではなく、母親と父親で強い父親像を家族の中に構成してもらおう介入を家族臨床家は行う。具体的には、母親が父親のやさしさの裏側にある厳しい一面を娘に伝え、かつ、娘の前で父親が母親に対して威圧的、支配的に接し、母親が従属的に受ける、というコミュニケーションの課題を行ってもらおう。このように、「強い父親論」を主張するのではなく、父親個人あるいは片方の性だけに問題を還元せずに、男性性、女性性をコミュニケーションによって作り出し問題解決を行うことができる。

##### 2. 専門職における女性性と男性性

女性専門職あるいは組織の中で高い地位の女性は組織の中でさまざまな葛藤を経験する（坂田, 2008）。女性自身が高い有能さを示しながらも低地位者に対する周囲の期待を侵害しないために、集団のために働くという集団志向性を示し、有能さを誇示せず他者を尊重しながらユーモアを交えて会話することが、女性リーダーの有効性を高めることであると示唆されている（Yoder, 2001）。すなわち女性専門職は女性性を高めることで周囲との葛藤を緩和し、組織の中で適切な態度ということになる。

一方、Heller (1982) によれば、女性、男性のリーダーは、自分と反対性のコミュニケーション行動を取り入れることで肯定的評価を得ると述べている。つまり、女性は男性的コミュニケーションを行い、男性は女性的コミュニケーションを行うことが効果的だということである。実際、女性の医師は男性の医師に比べて、患者から話をさえぎられることが多く、女性の管理職は男性の管理職よりファーストネームで呼ばれやすいという問題がある (Romaine, 1994)。女性専門職は男性性を高めることがこのような問題の解決には有効かもしれない。マーガレット・サッチャーは、かん高く感情的な声だと思われまいようイメージアップのためにピッチを落とし、メディアでもアナウンサーやキャスターの職に就いている女性はピッチを落として話していることが報告されている (Romaine, 1994)。

以上のように、ジェンダーを操作するという観点がある。奥野・長谷川 (2008) はこの観点に関して実証研究を行うため、終助詞の多寡を操作して専門家にコミュニケーションを行ってもらった。その結果、終助詞を用いず「言い切り」の表現のほうが、相手から合意が得られることを示唆した。佐藤 (2009) は末期がんの男性患者の事例報告から、患者の男性性を弱めるような女性看護師の指示的対応が悪循環になることを報告した。最期まで自分らしく強い男性として生きたいという患者の気持ちを尊重し、患者の男性性を支持する関わりが求められた。

以上のように、専門職のコミュニケーションにおける女性性と男性性について焦点を当てたが、専門職が用いる有効なコミュニケーションは一義的にそのどちらかであるとは言えない。女性の専門家が女性性を、男性の専門家が男性性を表現することで問題が発生すれば、反対の性を取り入れれば解決する可能性がある。女性の高地位者が男性的であることで相手との悪循環が起るようならば、女性性を高めればよいのである。このように、「ジェンダー」を操作して状況や文脈にあったコミュニケーションを模索し、新たなジェンダーを形成することは意義があると考えられる。

## V おわりに

本稿では、「ジェンダー」を個人の特性ではなく、コミュニケーションの相互作用過程で表出されるというシステム論的視点に立ち、「ジェンダー」をめぐる問題の解決を目指すコミュニケーションを「ジェンダー・フリー・コミュニケーション」として、女性性、男性性を変化させる意義について論じてきた。家族成員として、組織の一員として「ジェンダー」の葛藤を乗り越えるためのシンプルな回答はないが、「ジェンダー」を変化させる方向性を見立てるメタ相補的な立場を意識することが必要であろう。今後は、コミュニケーションのあり方に「ジェンダー」に対する意識を増やし、様々な臨床現場を射程した議論を展開していくことが望まれる。

<引用文献>

- 青野篤子・森永康子・土井伊都子 1999 ジェンダーの心理学－「男女の思い込み」を科学する－ ミネルヴァ書房
- 東清和 1997 展望 ジェンダー心理学の研究動向－メタ分析を中心にして－ 教育心理学年報 第36号 156－164.
- Baron-Cohen, S. 2003 *The Essential Difference*. 三宅真砂子訳 2005 共感する女脳、システム化する男脳 NHK出版
- Bateson, G. 1972 *Step to an ecology of mind*. New York : Brockman Inc. (佐藤良明訳 2000 精神の生態学 改訂第2版 新思索社)
- Cacioppo, J. T. & Petty, R. E. 1980 Sex Differences in influenceability: toward specifying the underlying processes. *Personality Social Psychology Bulletin*, 6, 651－656.
- 伊藤公男・國信潤子 2004 女であることの損・得、男であることの損・得 伊藤公男・樹村みのり・國信潤子著 女性学・男性学－ジェンダー論入門－ 有斐閣アルマ pp.1－17.
- 大坊郁夫 1982 異性間のコミュニケーション行動の変化 日本グループダイナミックス学会第35回大会発表論文集 1－2.
- 大坊郁夫 1983 男女の対人的コミュニケーション・パターンの研究 日本心理学会第47回大会発表論文集 772.
- 大坊郁夫 1992 会話事態における自己開示と対人的親密さ 日本心理学会第56回大会発表論文集 227.
- 大坊郁夫 2001 対人行動の社会心理学 北大路書房
- 大坊郁夫 2007 しぐさのコミュニケーション－人は親しみをどう伝え合うか－ サイエンス社
- Eagly, A. H. & Carli, L. L. 1981 Sex of researchers and sex typed communications as determinants of sex differences in influenceability : A meta-analysis of social influence studies. *Psychological Bulletin*, 90, 1－20.
- 江原由美子・好井裕明・山崎敬一 1993 性差別のエスノメソドロジー－対面的コミュニケーションにおける権力装置－ れいのるず＝秋葉かつえ編 おんなと日本語 有信堂高文社 pp.189－228.
- Exline, R. V. 1963 Exploration in the process of person perception : Visual interaction in relation to competition, sex, and need for affiliation. *Journal of Personality*, 31, 1－20.
- Exline, R. V., Gray, D. & Schuette, D. 1965 Visual behavior in a dyad as affected by interview contact and sex of respondent. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 201－209.
- Fishman, P. 1983 Interaction: the work women do. In Thorne et al. (eds.) *Language, Gender, and Society*.
- Hall, A. D. & Fagen, R. E. 1956 Definition of system. *General Systems Yearbook*, 1, pp.18－28.
- Hall, J. A. 1984 *Nonverbal sex differences : communication accuracy band expressive style*. Baltimore : John Hopkins University Press.
- 長谷川啓三 2006 ソリューション・バンクーブリーフセラピーの哲学と新展開－ 金子書房
- Heller, T. 1982 *Women and Men as Leaders*. Massachusetts : Bergin Publishers Inc. (矢嶋仁訳 1985 リーダーとしての女性そして男性 頤草書房)
- 平田オリザ 2004 「対話」してみませんか NHK日本語なるほど塾 日本放送出版協会
- 石川いずみ 2006 夫婦・カップルにおけるコミュニケーションの問題に関する研究－「性差」という視点から－ 東北大学大学院教育学研究科平成17年度課題研究論文(未公刊)
- 石丸暁子 2001 男女間のコミュニケーション－談話資料の分析からの観察－ 教育と医学 第49巻 第6号 546－552.
- 海妻径子 2004 近代日本の父性論とジェンダー・ポリテクス 作品社
- Karabenick, S. A. 1983 Sex-relevance of content and influenceability. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 9, 243－252.
- 寿岳章子 1979 日本語と女 岩波書店
- 今城周造 1984 情緒経験におよぼすリアクタンスの効果－漫画評価事態における検討－ 心理学研究 第55巻 第5号 268－274.
- 熊谷道子 2008 家族とジェンダー 青野篤子・赤澤淳子・松並知子編 ジェンダーの心理学ハンドブック ナカニシヤ出版 pp.131－148
- Lakoff, R. 1975 *Language and Woman's place*. New York : Harper & Row. (かつえ・秋葉・れいのるず・

- 川瀬裕子訳 1985 言語と性－英語における女性の地位 有信堂高文社)
- McGuire, W. J. 1968 Personality and susceptibility to social influence. In E. F. Borgatta & W. W. Lambert (Eds.), *Handbook of personal theory and research*. Chicago: Rand McNally, pp.1130 - 1187.
- Martin, S. 1975 *A reference grammar of Japanese*. New Heaven, CT: Yale University Press.
- 中村桃子 2002 ことばとジェンダー 勁草書房
- 奥野雅子・石川いづみ・越道理恵・長谷川啓三 2006 医療現場におけるコンセンサスに関してジェンダーの影響をめぐる一考察 日本家族心理学会第23回大会発表論文集 pp.13 - 14.
- 奥野雅子・長谷川啓三 2008 カウンセリング場面における説得的コミュニケーションの文末表現が受け手の態度に及ぼす影響－終助詞“ね”に着目した実験的研究－ 産業カウンセリング研究 第10巻 第1号 12 - 21.
- 井出祥子 1985 女性の敬語の言語形式と機能 文部省科学研究費研究成果報告書
- 井出祥子 1997 女性語の世界－女性語研究の新展開を求めて－ 井出祥子編 女性語の世界 明治書院 pp.1 - 14.
- Romaine, S. 1994 *Language in Society - An Introduction to Sociolinguistics*. Oxford University Press. 土田滋・高橋留美訳 1997 社会のなかの言語－現代社会言語学入門－ 三省堂
- Rosenthal, R., Hall, J. A., DiMetteo, M. R., Rogers, P. L. & Archer, D. 1979 *Sensitivity to Non-verbal Communication: The PONS Test*. Baltimore: John Hopkins University Press.
- 坂田桐子 2008 組織とジェンダー 青野篤子・赤澤淳子・松並知子編 ジェンダーの心理学ハンドブック ナカニシヤ出版 pp.167 - 186
- 佐藤恵子 2009 緩和ケアにおける心理士の役割－システム論的視点からの検討－ 日本ヒューマン・ケア心理学会第11回大会発表抄録集 30.
- Swann, J. 1988 Talk control: an illustration from the classroom of problems in analyzing male dominance of conversation. In Coates & Cameron (eds.) *Women in Their Speech Communities*.
- 高橋恵子・湯川隆子 2008 ジェンダー意識の発達－男らしさもつくられる 柏木恵子・高橋恵子編 日本の男性の心理学－もうひとつのジェンダー問題－ 有斐閣 pp.53 - 96
- Tannen, D. 1991 *You Just Don't Understand: Women and Men in Conversation*. New York: Ballantine Books.
- 内田伸子 1993 会話行動にみられる性差 井出祥子編 日本語学 第130巻 156 - 168.
- 上野千鶴子 2006 生き延びるための思想－ジェンダー平等の罨－ 岩波書店
- 上野徳美 1999 説得的コミュニケーションに対する被説得性の性差に関する研究 実験社会心理学研究 第34巻 第2号 195 - 201.
- Watzlawick, P., Beavin, J. & Jackson, D. D. 1967 *Pragmatics of human communication: A study of interactional patterns, pathologies, and paradoxes*. New York: W. W. Norton & Company. (山本和郎監訳 1998 人間コミュニケーションの語用論－相互作用パターン、病理とパラドックスの研究－ 二瓶社)
- West, C. & Zimmerman, D.H. 1987 Doing gender. *Gender and Society*, 1(2), pp.125 - 151.
- Yoder, J. D. 2001 Making leadership work more effectively for women. *Journal of Social Issues*, 57, 815 - 828.
- Zimmerman, D. H. & West, C. 1975 Sex roles, interruptions and silences in conversation. In Thorne & Henley (eds.) *Language and Sex*.